



営農タイムリー！



発生予察情報について(6月)

2025年5月26日発行

病害虫発生予報第4号(6月)

京都府病害虫防除所より、6月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第4号(6月) (抜粋)

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	葉いもち ニカメイチュウ(第1世代) ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ	<u>やや多</u> (並) <u>やや多</u> (やや多) 並(並) 並 少(少) 並(やや多)
ブドウ	べと病	<u>やや多</u> (やや多)
カキ	落葉病 うどんこ病	<u>やや多</u> やや少(並)
果樹全般	カメムシ類	<u>やや多</u> (やや多)
果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病 ハダニ類 アザミウマ類	並(並) 並(並) <u>やや多</u> (多) やや少(やや少)
キュウリ	べと病 斑点細菌病	<u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (やや多)
ネギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	<u>やや多</u> (多) やや少(並) やや少(やや少)
野菜類	アブラムシ類とモザイク病	<u>やや多</u> (多)
アブラナ科野菜	コナガ	<u>やや多</u>

イネ

1. 葉いもち

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 空気伝染し、発病適温は14～30℃(最適25℃)である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。湿度が高いと病斑が進展したり、胞子の形成量が高まったりする。
- (2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。
- (3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。補植後、速やかに残り苗を処分する。
- (4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- (5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。

2. ニカメイチュウ(第1世代)

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は5月第5～6半旬頃である。
- (2) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (3) 稲ワラ(敷ワラ)を使用する野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

3. ヒメトビウンカ と 縞葉枯病

予報内容 発生量 : ヒメトビウンカ 平年並 (前年並)

縞葉枯病 平年並

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況が翌年の発生に影響する。
- (2) 通常、ヒメトビウンカ第1世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
- (3) イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカにより媒介され経卵伝染する。

4. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : 平年比少ない （前年比少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、イネ萎縮病等を媒介する。

5. イネミズゾウムシ

予報内容 発生量 : 平年並 （前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の新成虫が越冬し、田植え後、水田に侵入して葉を食害する。5月中下旬から卵を産む。
- (2) ふ化した幼虫は、土中で根を食害する。
- (3) **イネ**が根腐れするような水田では幼虫の被害が出やすいので、深水を避け、根を健全に保つ。
- (4) 浅水管理は成虫の産卵行動を阻害し、産卵場所を制限する効果がある。
- (5) 粒剤の育苗箱施用の効果が高い。なお、**イネドロオイムシ**の常発地では、この方法で**イネドロオイムシ**も合わせて防除ができる。
- (6) 育苗箱施用をしなかった場合や田植え後発生が多く、成虫が株当たり0.3頭を越える場合は、そのまま放置すると経済的被害が発生する。

果 樹

1. フドウ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い （前年比やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- (2) 発病適温は22～25℃である。
- (3) 5～6月に多雨であると多発生となりやすい。
- (4) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- (5) 新しく柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

2. **カキ** 落葉病

予報内容 発生量 : **平年比やや多い**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 角斑落葉病と円星落葉病があり、前者の発病は7月から、後者は9月から見られる。主な感染時期は前者が6月中旬から7月中旬で、後者が5月下旬から7月上旬である。前年の被害葉(落葉)に形成された前者は分生子、後者は子のう胞子が第一次伝染源となる。降雨の多い年ほど被害が多い。感染時期の防除を徹底する。

3. **カキ** うどんこ病

予報内容 発生量 : **平年比やや少ない(前年並)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の被害葉(落葉)や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。
- (2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。

4. **果樹全般** カメムシ類

予報内容 発生量 : **平年比やや多い (前年比やや多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来して局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) 夜行性であるため、夕方の防除が効果的である。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

野菜

1. 果菜類 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを張り、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。

2. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなりやすい。
- (3) 過繁茂を避け、肥培管理に注意する。

3. 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 高温乾燥が続くと、発生が増加する。
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

4. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するミカンキイロアザミウマやネギアザミウマ等の種類もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では高温乾燥が続くと、特に多発しやすいので注意する。
- (3) ハウス内及びほ場周辺の除草を徹底する。

5. キュウリ ベと病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと、初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。

6. キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病するが多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。

7. ネギ さび病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。

8. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA(従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB(別系統)の発生を確認しているので注意する。

9. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。**ネギ**では葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、**ネギえそ条斑病**の原因となるアイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spotvirus: IYSV) を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、**赤色系**防虫ネットや UV カットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

10. 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量 : 平年比やや多い (前年比多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アブラムシ類**には直接吸汁加害するだけでなく、**ウイルス病**を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) 高温乾燥が続くと発生が多くなる。
- (4) **キュウリ**の**急性萎凋症**の発生の多いところでは、**アブラムシ類**の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。

11. アフラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量 : 平年比やや多い

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く(10~12回/年)、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (3) 防虫ネット等を利用し、物理的防除に努める。

今後注意すべきその他の病害虫等

イ ネ

1. スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)

- (1) スクミリンゴガイは在来タニシ類などに比べて貝殻が薄く傷つきやすいので、ロータリー耕うんにより機械的に貝を破碎し密度を低下させることができる。土壌の水分が少なく田面が硬くなる水稲収穫後の耕耘が最も殺貝効果が高い。また、土中に潜って越冬するが、その深さは6cm 未満が大部分なので、耕うん深度は浅くてよいが、できるだけ土の硬い時期にピッチを小さくして(通常の1/2 以下の作業速度が望ましい)いっきに耕うんすると殺貝効果が高くなる。さらに、越冬場所をなくすため、水路の泥上げを地域全体で行うと効果的である。
- (2) 苗を移植する前に、田面を細かく耕うんし、越冬した大きな貝を殺す。
- (3) 水路からの侵入を防止するため、取水口に9 mm 目合程度のネットなどを設置する。
- (4) 地区内での発生が一部に限られる場合は、農業機械に付着した泥の含まれる本貝を未発生ほ場に持ち込み、発生を広げないことが重要。作業を行う順番を考慮するとともに、既発生ほ場からの土の移動の危険がある場合には、農業機械の洗浄等の対策を講じる。
- (5) 貝が水稲に被害を及ぼすのは田植え後、約3 週間までで、その間、水深を出来るだけ浅く保つ。水深1cm が理想だが、4cm 以下に保つと実害が出にくい(貝は水中でのみ摂食する生態のため)。
- (6) 圃場の均平で重要ある。圃場が凸凹だと深いところの株が被害され、一方、土が水から長時間露出すると除草剤の効き目が劣ってくる。田植え前に圃場の高低を修正するとともに、被害が生じやすい田植え直後は極く浅水とし(一部の土が水面上に出ても)、徐々に水深を増加させるなどの工夫が必要。
- (7) 前年の被害が大きかったほ場に移植する苗には、箱施用剤を使用する。

果 樹

1. カ キ カキノヘタムシガ、カキクダアザミウマ

果実の被害を防ぐため、開花終了後から6月下旬にかけて防除する。

2. フ ド ウ 灰色かび病

- (1) 発病適温は23℃前後で、開花前に降雨が続くと、突発的に発生することがある。
- (2) ハウス栽培では開花前から換気に努め、予防散布を徹底する。
- (3) 果粒に付着した花がらは、速やかに落とす。